

photopos 42

2017.6.28 ~ 2017.7.22

【神秘学ポエジー～風遊戯 第84集】

photo ヴァージョン

photopos1026-1050

神秘学遊戯団

photopos-1026

2017.6.28



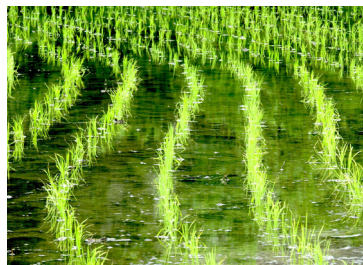
夏の風を受けながら
畦道でぼくは
自転する地球の上を歩く

太陽の風を受けながら
宇宙空間で地球は
自転する太陽のまわりをまわる

銀河系の風を受けながら
宇宙空間で太陽は
自転する銀河系のまわりをまわる

目を閉じて
ぼくは宇宙のなかを歩くじぶんの
不思議な動きを想像してみる

けれどぼくが宇宙の真ん中にいるのだとしたら
地球は太陽は銀河系は
どんなふうに動いているんだろう



*松山市北条にて

photopos-1027

2017.6.29



ぼくのなかの月が
満ちては欠ける

同じ顔を向けていても
たえず光の顔を変えながら

ぼくのなかの潮が
寄せては返す

同じ形を繰り返していても
たえず変わり続けながら

ぼくのなかの風が
吹いては過ぎる

同じ声で歌っていても
たえず新たな心の詩を紡ぎながら



*松山市北条にて

photopos-1028

2017.6.30



こんなにも
時間が泳いでいるのに
ほんとうの時間が見つからない
時間の見えない日
ぼくは時の間へ旅に出る

こんなにも
言葉が使われているのに
ほんとうの言葉が見つからない
言葉があまりに遠い日
ぼくは言の葉のそよぐ樹を探す

こんなにも
音楽があるのに
ほんとうの音楽が見つからない
音があまりに虚ろな日
ぼくは楽を聴きとれる耳になろうとする

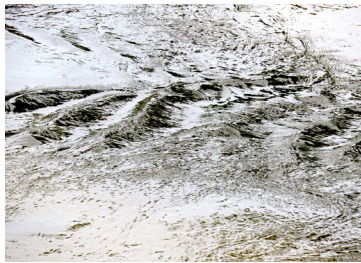
こんなにも
ぼくがいるのに
ほんとうのぼくが見つからない
ぼくがだれなのかわからない日
だれでもないぼくはだれでもないぼくを演じている



*松山市北条・立岩川にて

photopos-1029

2017.7.1



水が文字になることだってある
雲が文字になることさえあるように
そしてその文字は
秘密の印となつてきらめく

言葉が無意味になることだってある
むしろそのほうが多いくらいだ
無意味ならまだいい
嘘が正しさの仮面で語られるとき
仮面と素顔は融合して異形の顔になる

何も言わなくていいんだ
言わないでおいたほうが
沈黙の力が何かを導いてくれる
その奥から秘密の言葉が姿を現してくるまで
じっと待ち続けことができるかどうか
それが言葉を嘘にしないための
ただひとつの道だから

*松山市北条・立岩川にて

photopos-1030

2017.7.2



空蝉の
我が身
映すか
水鏡

見るほどに
虚ろなる身を
如何せん

鏡の奥の
秘かな光
我が身の真を
明らめよ



*松山市北条・立岩川にて

photopos-1031

2017.7.3



※松山市北条・立岩川にて

幾度も幾度も
繰り返した夢を
私はまた性懲りもなく
生き直しているのだろうか

權はわが影を漕ぎ
常に死角にあるわが影を
あらかじめ閉ざされた影を
後ろへ後ろへと遠ざけてゆく

遠ざけられた影は
メビウスの時の輪となって
再び巡り来るのだが
そんなことなど知らぬげに
影はまた遠ざけられ続け
その繰り返しが生きられてゆく

やがて影は重なり重なり
大きな波となり嵐ともなり
巨人ともなって襲い来るのだが
その記憶さえもまた失われ

「そして、それが、
今の今、
昨日になり、一昨日になり、
二十年、三十年の昔になる。」

*引用部分：入沢康夫「七月・舟旅の思ひ出」より
（『詩集「月」 そのほかの詩』1977年思潮社刊・所収）

photopos-1032

2017.7.4

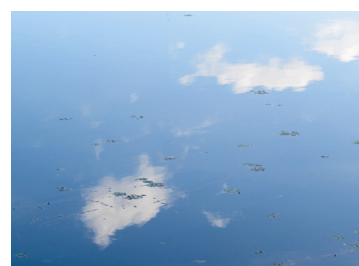
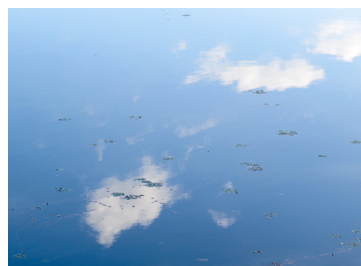
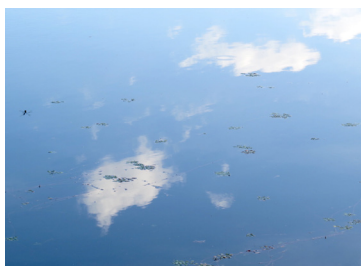


水は鏡
空の雲を映す

空は鏡
鏡から放たれた光は
また空へと照らされる

私は鏡
水と空の合わせ鏡で
交わされる光は
私のなかに移される

夏の日
移された光は
私の記憶の絵のなかで
永遠の夏の日となる



※愛媛県今治市・蛇池湿地にて

photopos-1033

2017.7.5



昼下がり
まどろみのなか
碧い獣になって
森を駆けている

いいか
おまえのいちばん嫌いな
じぶんを見つけるのだ

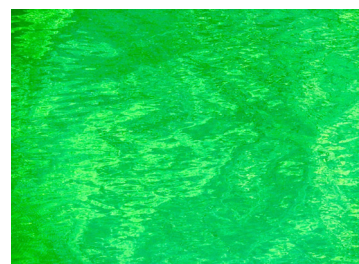
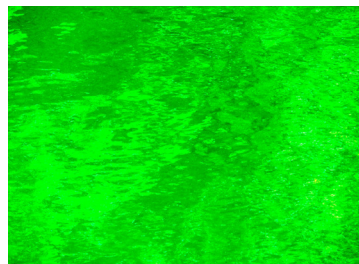
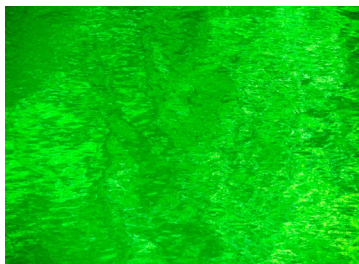
森の音が衍し
獣の音がそれに応える

おうよ
おれのいちばん嫌いな
じぶんを探そうぞ

獣はじぶんをあざ笑い
森の奥の湖へと向かう

いちばん嫌いな
おれさまを映すのだな

まどろみのなか
碧い鏡のなかを
獣の鋭い叫び声が響き渡る



※愛媛県伊予市・大谷池にて

photopos-1034

2017.7.6

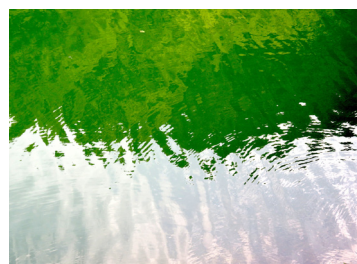


森の奥の湖に
獣はみずからを映す
いちばん嫌いなじぶんを

そして叫ぶのだ
かぎりない嫌悪とともに
けれども
深い祈りを込めて

おお おお おお
変われるならそれもよし
変われぬならそれもよし

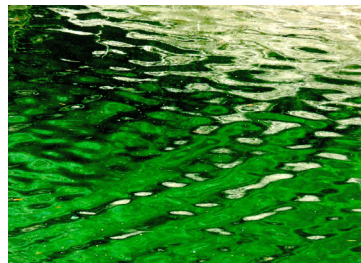
獣はひらりと身をかまし
秘やかな囁いを残しながら
碧い森の沈黙のなかへ



※愛媛県伊予市・大谷池にて

photopos-1035

2017.7.7



沈黙のなかで
獣は煩悶する
かつておれは
獣ではなかったはずだ

森を駆けるあいだに
おれは獣と化した
心を映す森のなかで
おれは心の姿と化したのだ

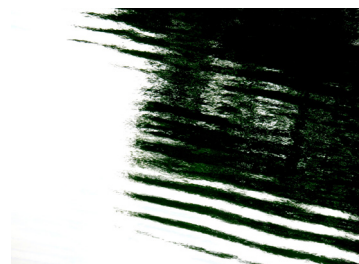
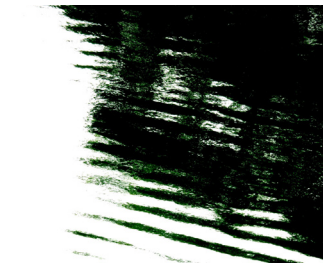
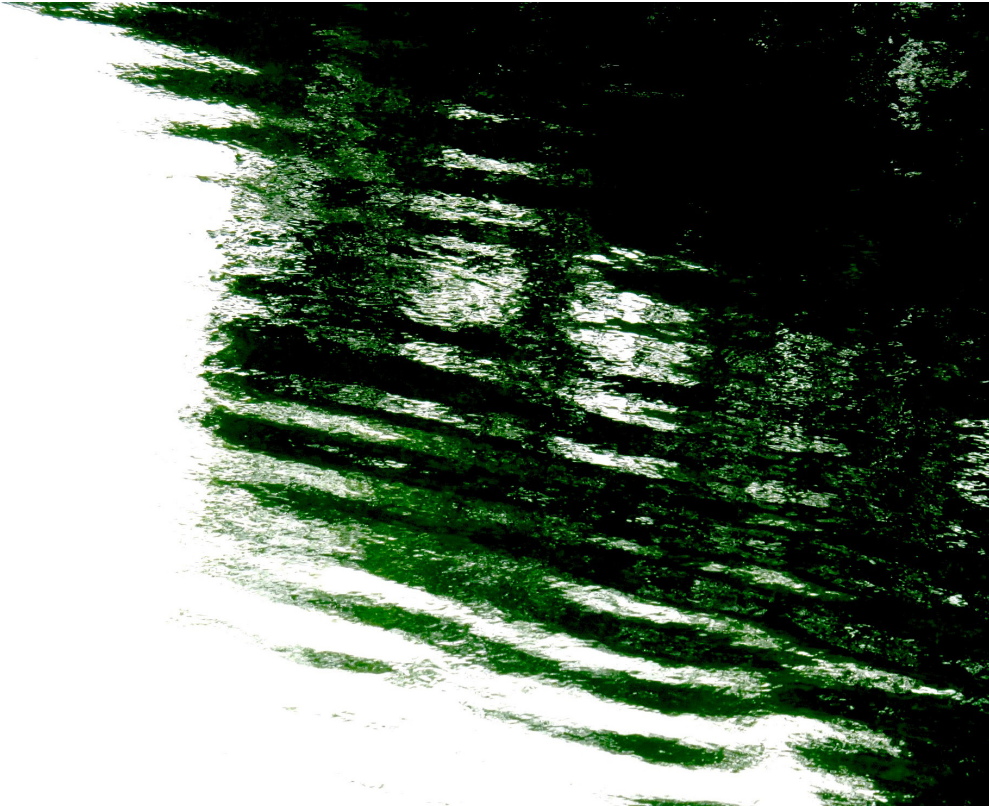
森のなかでは
さまざまな獣と出くわした
偽善の牙で己を研ぐ獣
欲の舌で己を舐める獣
怒りの炎で己を燃やす獣
知識の爪で己を裂く獣

己の姿を映してみよ
そう森の罅は告げたのだ
己に気づければどうなのだと

※愛媛県伊予市・大谷池にて

photopos-1036

2017.7.8



※愛媛県伊予市・大谷池にて

渴く
渴くのだ
まだ見えぬものに
渴くのだ

映し出された獣の姿は
刻々と姿を変えてゆく

驚愕すれば驚愕の姿に
焦燥すれば焦燥の姿に
慟哭すれば慟哭の姿に

求めるならば
与えねばならないからだろう

ならばこの渴きは
いかなる水を与えれば
癒されるというのか

森は問いを見えぬ風にかえて
湖面に静かに吹き渡ってゆく

photopos-1037

2017.7.9



そこに境があり
向こうへと渡るには
ときに永遠ほどの
歩みが求められる

けれども我らは
その永遠の歩みを経て
再び還って来なければならぬ

還って来なければ
我らが何故にここにいるのか
それがわからないのだ

そのときはじめて
境の意味もまた了解される
境の向こうとこちらが
照らし合う鏡であることがわかるのだ



※愛媛県松山市・北条にて

photopos-1038

2017.7.10



宇宙のはじまりは
大いなる問いではなかったか

問いの力が放たれ
広がり続ける

光こそ問いであり
その問いで闇を照らし
闇は光を飲み込みまた問いを返す

問いの星雲よ
問いの恒星よ
問いの惑星よ

それらの回転とともに
私という謎も回転する

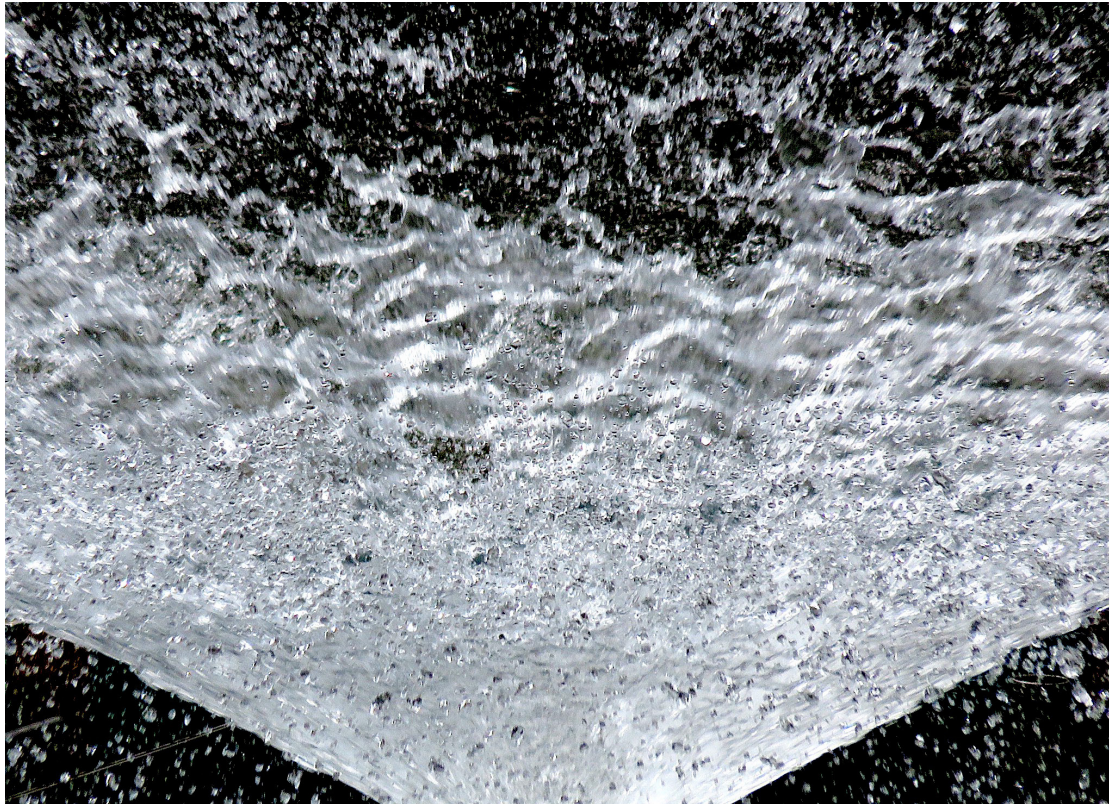
私のはじまりもまた
大いなる問いではなかったか

問い始めるとき私ははじまり
問うことを止めるとき私は終わる

※松山市・堀之内にて

photopos-1039

2017.7.11



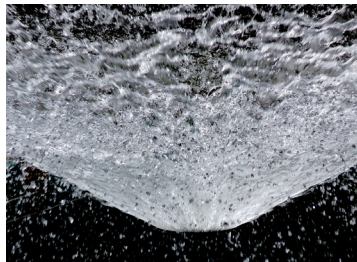
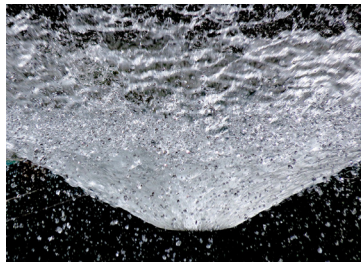
泉は生成する
祝祭はここに

水湧き地歌い
祈りは尽きず

大地は天空へ
天空は大地へ

天地は開かれ
光は交響する

重々無尽する
縁起の曼荼羅



※松山市・堀之内にて

photopos-1040

2017.7.12



※松山市・堀之内にて

求めても
得られない水があり
堰き止めようとしても
堰き止められない水がある

求めても
得られない光があり
陰を求めても
照らし続ける光がある

求めるという
人の苦しみは
癒やされるだろうか

わが内に
水よ充てよ

渴きを癒やし
襲い来る渴望の剣を
穏やかな花に変えるように

わが内に
光よ充てよ

闇を照らし
木陰に憩う
穏やかな風とともに

photopos-1041

2017.7.13



じぶんの顔が
わからなくなってしまう日には
仮面をはずして
笑ってみるのがいい

仮面の奥の顔は
じぶんでも見たことがないだろうが
それがただの穴ぼこだっていいじゃないか
笑いだけになったチェシャ猫のようにさ

ひとの顔が
わからなくなるのはいつものことさ
最初から覚えていないことも多いけれど

そんな日にも
ひとから仮面を外してみるといい
忘れた自分の顔が
そこで途方に暮れているかもしれないから

※松山市・堀之内にて

photopos-1042

2017.7.14



漂う舟の如く
彷徨うは我が身
迷うはわが心

浮かぶ瀬はあるか
わからぬまま漂い
行方定めず風を待つ

されどもそこには
漂う水の自由あり
吹く風之力あり

さればこそ
漂う舟となりて
光あるうちは光の中を行け
天を仰げるならば天を上げ
迷い彷徨いながら行け



※松山市北条にて

photopos-1043

2017.7.15



どんな顔をすればいいのか
わからなくなったら
大きな樹になるんだ
激しい雨や風でも
へっちゃらな樹に

そして大きな枝のように
腕を伸ばし葉を茂らせて
思いきり光を浴びるんだ
鳥たちも囀れるように

なにを話せばいいのか
わからなくなったら
大きな樹になるんだ
押し黙っていても
そこにいるだけで根づいているような

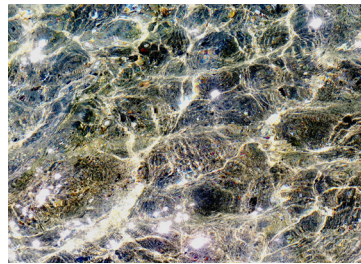


沈黙するほうが
多くを語ることだってある
ゆっくりと静かにゆれているだけで
その調べは奏でられているから

※松山市・堀之内にて

photopos-1044

2017.7.16



海の森は光の森
光の道を弦にして
奏でる水のしらべとともに
ゆれゆらゆれてゆきましょう

ゆれゆらゆれて
そのうちに
光の夢も見るでしょう
光の夢のそのなかで
歌の秘密を知るでしょう

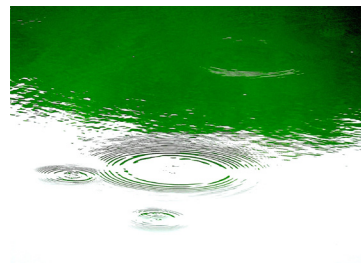
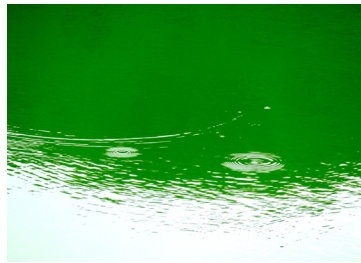
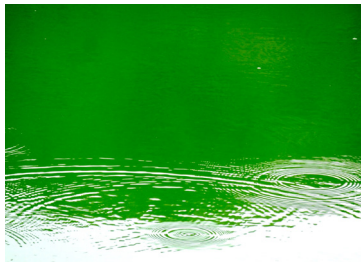
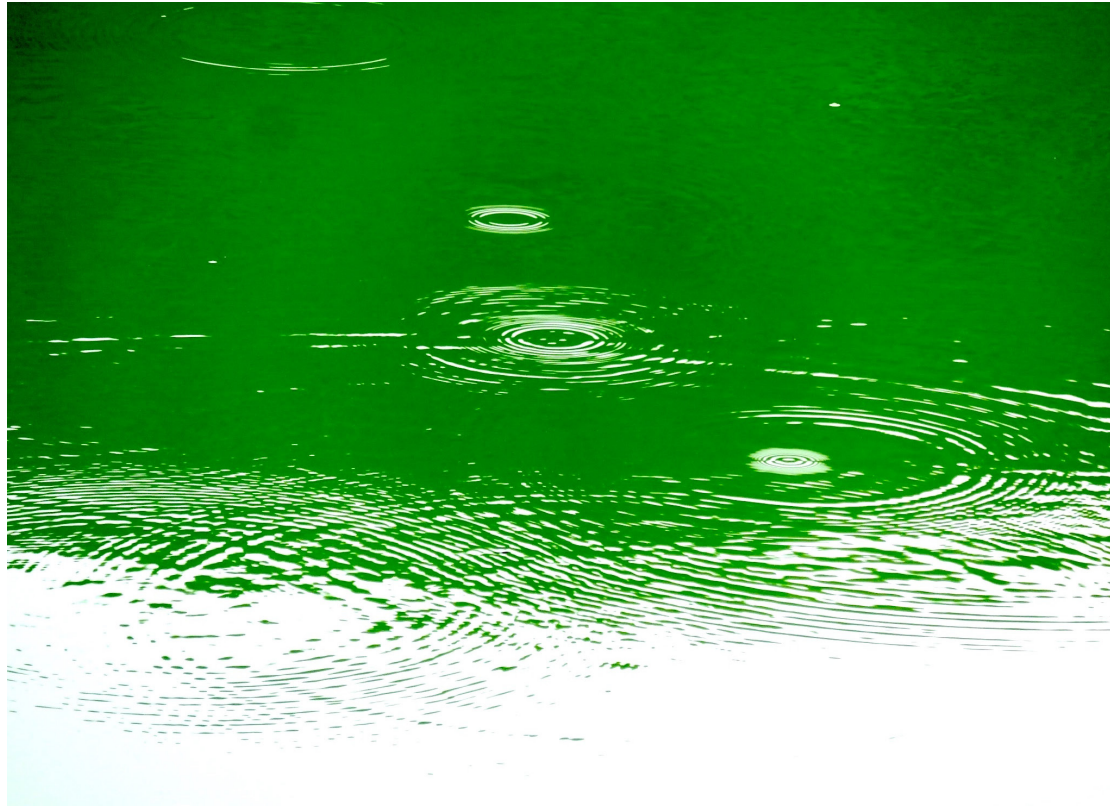
夜の光は星の光
星座の道を弦にして
奏でる天のしらべとともに
きららきららゆきましょう

きららきららと
そのうちに
銀河の夢も見るでしょう
銀河の夢のそのなかで
星の秘密を知るでしょう

※愛媛県今治市菊間にて

photopos-1045

2017.7.17



ごらん
水の上で
精霊が歌っている

虫たちは知っているんだ
風が運んでくるものを
水が伝えようとしているものを

ごらん
ぼくの上で
もうひとりのぼくが歌っている

ぼくでないぼくは知っているんだ
見えない世界から運ばれてくるものを
生と死を超えて伝えようとしているものを

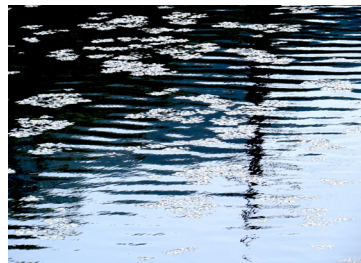
ごらん
地球の上で
もうひとつの地球が歌っている

地球でない地球は知っているんだ
見えない宇宙から奏でられている音楽を
多次元宇宙から伝えようとしている響きを

※松山市北条にて

photopos-1046

2017.7.18



※愛媛県今治市・医王池にて

森を歩けば
森の記憶が映り
風が渡れば
風は物語を運ぶ

すべてはそこにあり
失われるものはなにもないけれど
すべては忘れられてゆき
忘れられてゆくことで
新たな記憶と物語が生まれるのだが

ときおり
森と風の不思議な声が聞かれるのだ
忘れられたものが甦ってくるように

空の彼方には
見えない空があり
大地の彼方には
見えない大地がある

すべてはここにあり
失われるものはなにもないけれど
すべては見えなくなってゆき
見えなくなってゆくことで
人は新たな空と大地を生きてゆくのだが

ときおり
空と大地は不思議な姿を見せるのだ
見えなくなったものが現れてくるように

photopos-1047

2017.7.19



水のレンズを
透して見れば
光は不思議の
生き物になり

風をあやつる
魔法の言葉を
紡いで解き
解いては紡ぎ

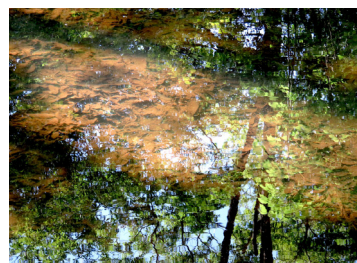
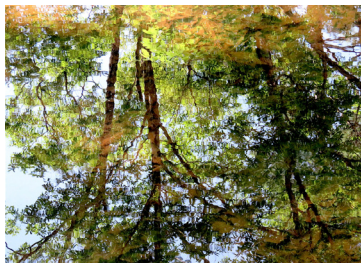
波のまにまに
まどろむ夢も
寄せては返し
返しては寄せ



※松山市北条にて

photopos-1048

2017.7.20



※岡山県新見市哲西町・鯉が窪湿原にて

夢のなかに
旅しなくても
夢と現は
幾重にも重なっている

鏡のなかに
入っていかなくても
私は幾重にも
みずからを照らしあいながら
多重世界を往還している

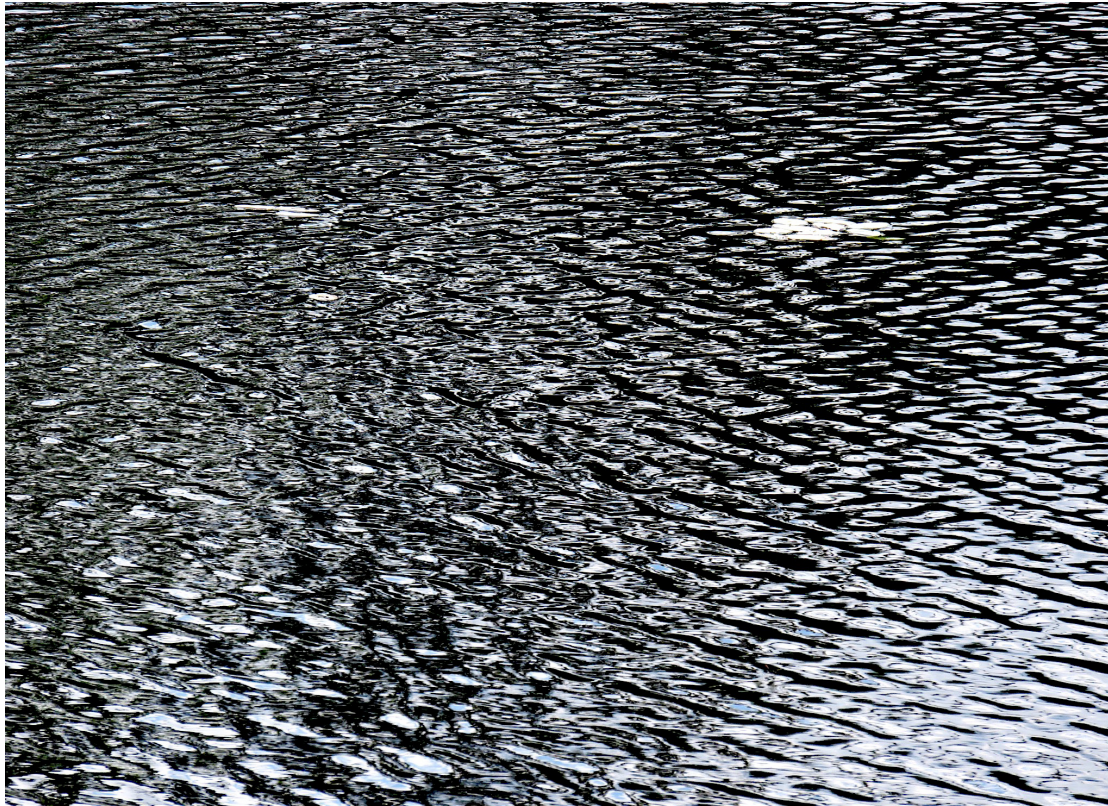
どうして世界は
ひとつに見えているんだろう
こんなにもたくさんの世界が
幾重にも幾重にも重なっているのに

もうひとつの世界のなかで
もうひとりの私が目を覚ます
そんなとき
私はじぶんにひとつ
遊びを提案してみたんだ

俗に生きるのはたやすい
俗から離れて生きるのはたやすい
ならば俗に生きながら
俗から離れて生きる
そんな矛盾を生きてみないかと

photopos-1049

2017.7.21

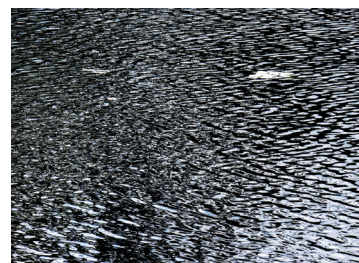
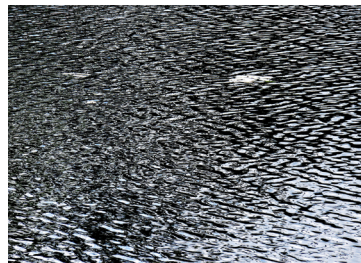
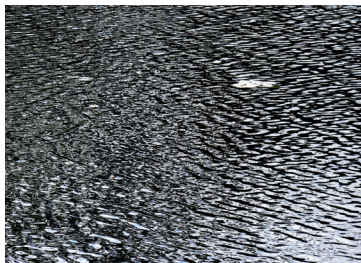


姿なき姿求め
風騒ぎ
心騒ぎ
数えきれぬ
夢のくさぐさ

すべてはやがて
跡形もなく消えゆくだろうが
形なきものは残るだろう

風の描く
水の秘文字
鏡に綴られてゆく
天と地の舞

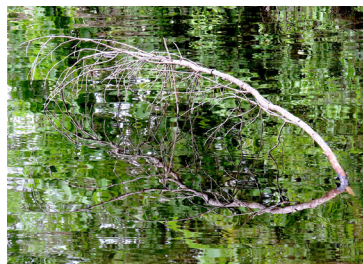
我もまた姿なき者
無常の常にして
生まれし体は消えゆくだろうが
未生の体は天と地を舞うだろう
風と水の戯れの如く



※岡山県新見市哲西町・鯉が窪湿原にて

photopos-1050

2017.7.22



※岡山県新見市哲西町・鯉が窪湿原にて

往古より真実は
鏡に映じられた姿で
占われたりもしたという

しかしながら鏡は魔物だ
そうでないときでも
鏡を見る目こそ魔物だ

美しき者は自らに溺れ
醜き者は自らを厭い
常に真実は隠蔽された

つまり真実の姿など
ついぞ見えたためしはないということだ
見えたとしてもその真実は認めがたいのだ

されど真実を見んとする勇者は後を絶たず
鏡は常にその象徴として祀られもした
汝自身を知れということだ

映じているのは鏡映でしかないのだが
みずからを他者化するためには
他に方法を見出すことは難しいのだろう

けれどももういいのだ
己の真実そのものの姿に
化身する時代が来るという

遅かれ早かれ死の後には
己の姿を直視せざるをえないのだが
それが現のなかにも姿をとるということだ

己の内なる見えぬ鏡には
すでにその姿は映じているのだろうが
まさにか（が）みのみぞ知るところだろうか